

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年一月十三日印刷（毎月一回）
（十五日發行）

誌雜劇演

一唯西關

道 類 振

號六十四百第



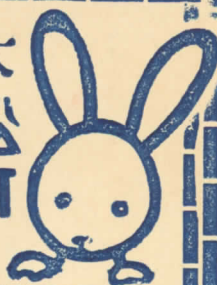
一部
20
セ

月 一 年四十第
號 春 新

大阪各名物爆笑劇團進出公演

元日初日
知
は

松竹家劇



◇ 最初の晝夜二部興行 ◇

◇ 九日よりの六十日まで
晝の部と夜の部を
入替えて上演致します

晝の部 (十二時開幕)

- 第一 戒餅と大黒餅 三場
茂林寺文福作・大和田想外脚色
- 第二 寒紅梅 二場
茂林寺文福作 尾崎實三脚色
- 第三 質屋と娘 三景
中野實作 山上貞一演出「キング」所載
- 第四 愉しき働き 三場
茂林寺文福・船直志合作
- 第五 赤い家青い家 一場
和老亭當郎作・茂林寺文福改稿

夜の部 (五時半開幕)

- 第一 愉快な衝突 三場
茂林寺文福作
- 第二 喧嘩賣買 二場
茂林寺文福・船直志合作
- 第三 新婚ホテル 二場
本庄桂輔作・山上貞一演出「中央演劇」所載
- 第四 ハットン婆さん 二場
茂林寺文福・船直志合作
- 第五 鬼とカメ 二場

廿七日は前売開始

◇ 前 賣 初奉興行に限り一日より八日まで

の一等指定席券を廿七日より發賣いたします
二等席より櫻席までは前日より發賣致します

前賣團體專用電話(夜)二八二八

◇ 一幕券は毎開幕前に發賣

初日より五日まで

初日は晝十一時・夜五時開幕
二日より晝十一時半・夜五時開幕
六日より晝十二時・夜五時半開幕

◇ 櫻 四十錢
◇ 菊 七十錢
部 九十錢
觀 二十錢
劇 一元二十錢
料 一等二 円

外に入場税一圓

健康な銃後の娛樂は家庭劇へ!!
新年の楽しい御會合には是非當座
の御利用を願ひます。

大阪歌舞伎座

有價證券買賣

支店 東京市日本橋區南本町

日本信託銀行

會社株式



本店 大阪市東區今橋二丁目

證券金豐



東側掛

目次

道頓堀 第四百四十六號

春狂言と大近松……………木谷蓬吟(2)

□「壽門松」の實説……………(5)

忠臣藏の考察……………森 ほんほ(20)

松切と山崎街道……………菱田正男(16)

□清元「卯の花」……………(32)

歌舞伎の中の道化……………濱村米藏(10)

劇化された能狂言……………天野梅徑(22)

□川花形役者……………牡丹・千枝・井窓(13)

大阪青年歌舞伎の擁立額田六福(6)

□川芝居雪月花……………(25)

綺堂先生芝居談義……………森 ほんほ編(8)

事變後の美術家劇……………原田信造(14)



短文隨筆集

私ご京都……………片岡我當(18)

京の鯛かぶ……………澤村訥舛(〃)

思出多い京都……………坂東鶴之助(〃)

忠臣藏の私の役々……………中村扇雀(19)

春は角兵衛獅子になつて沼兵十(26)

小笠原流禮忠孝……………(28)

小さん金五郎……………(29)

高利貸の秘書……………(30)

□曉座を見る……………喜光則子(31)

編輯後記……………(32)

□繪 能、芝居、人形の三番叟——中座春狂言(延若の金五郎、梅玉の小三)——南座の忠臣藏(我當の定九郎、訥舛のおかる、扇雀の勘平)——人形圖解(其一)

表紙……………翁(白式尉)の面

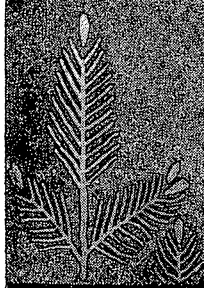
扉……………美(アナートル・フランス)

酒

銘

白
雲

开



灘 丹伊 津 攝
社 會 式 株 造 酒 西 小

能・芝居・人形
“三番 雙”



梅玉の額の高三



勝談 藏原作
 丁東詞 庵脚色
 金南南北衣 斐考案 十合調製
 士の忠 統後の孝はもつて
 きおろし 以来の大名願

小笠原流禮忠孝十二書
 幕明神獄芒原
 笠原豊前守
 上上兵主
 松賀丹
 賀茂平太
 原喜福間
 士正福間
 壽笑太内夫六税部
 芦若政鶴美延壽市吉
 十之 之 三
 紅郎助藏騰郎助藏郎

延若の金屋金五郎

言狂春初座中
 (狐原笠小・郎五金んさ小)

“忠臣蔵”の南座.



(雀扇村中) 早野勘平

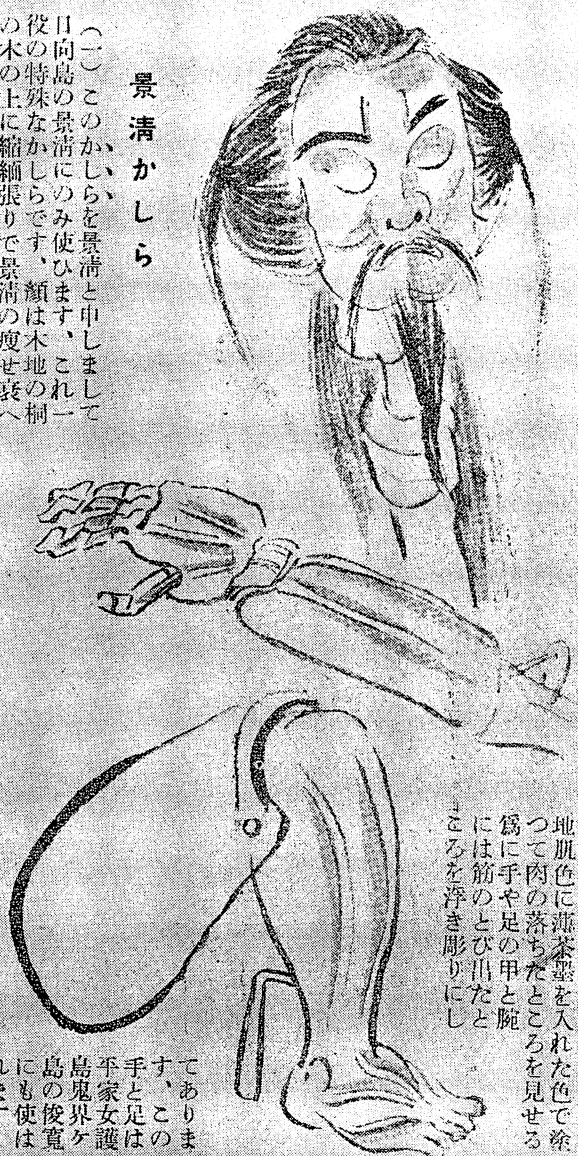
(外訥村澤) おかろ

(當我岡片) 定九郎

文樂人形圖解 (一)

齋藤清二郎解説並繪

(此人形圖解は興行毎に續きま
すかしどうぞ御保存下さい)



景清手、景清足

地肌色に蒔茶器を入れた色で塗
つて肉の落ちたところを見せる
爲に手や足の甲と腕
には筋のとび出たと
ころを浮き彫りにし

てありま
す、この
手と足は
平家女護
島鬼界ヶ
島の俊寛
にも使は
れます

景清かしら

(一) このかしらを景清と申しまして
日向島の景清にのみ使ひます、これ一
役の特殊なかしらです、顔は本地の桐
の木の上に縮細張りて景清の瘦せ衰へ
た感じが良く出てゐます。

(二) あたまは總髪でひつくゝり眼は
玉眼で朱色が塗られてあります、作は
相當古く昔から今に傳つてゐる所謂文
樂かしらのうちの名寶級の一つです。

- 一、かしらとは首の事
- 二、あたまとは髪のこと

謹賀新年



本誌が獨り夕刊新聞として覇を爲すに止まらず全日本の新聞界に於ても鬱然として一大王國の觀があるのは單に面白いからのみではない、讀めば必ず胸奥を震撼させずには居ない感
 激と正義の文字で紙面が盛上つて居るからである。人情風俗の活映畫、財界の波、商機の動きには正確の羅針盤、讀みた
 い新聞、讀まねばならぬ新聞、讀まずには居られぬ新聞。

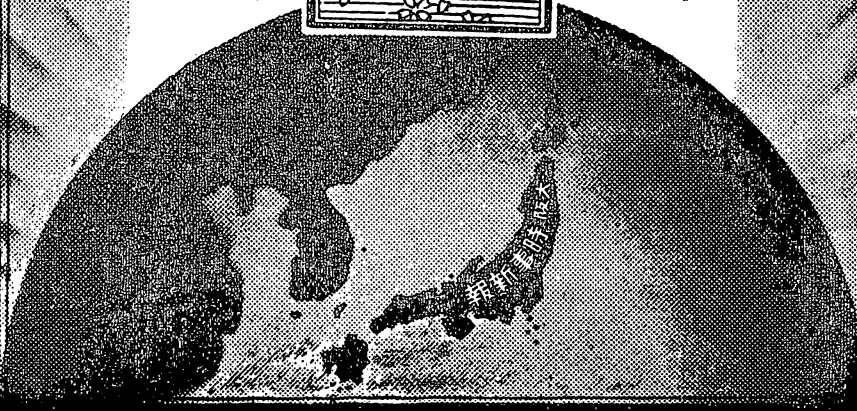
代	開	新
錢	貳	部
錢	十	月
	五	一
	錢	稅
	五	郵
	十	
料告廣		
錢拾參圓壹行一欄通普		
圓貳行一欄別特		
所行發		
濱北區東市阪大		
地番七目丁四		
社聞新日日阪大		
濱北話電		
1101	・ 1102	・ 1103
1104	・ 1800	・ 2600
7	0	7
用送發付受間夜		1
		1011

祈皇軍武運長久



大時市新報

皇紀 2599



毎夕八百の大夕刊

夕刊 大阪新聞

日本工業新聞

朝刊十三頁

日本工業新聞によつて
工業界の動向を知りこれに
順應する施設をなせ
日本工業新聞によつて経済界の
趨勢を知悉し機宜を誤ら
ざる對策を講せよ

大阪 北區堂島濱通四ノ三
東京 麹町區有樂町二ノ四

謹 賀 新 年

◇不屈權勢、不媚富貴
◇議論公明、報道迅速

◇夕刊四頁發行



大阪市北區天神橋筋四丁目三六

發行所

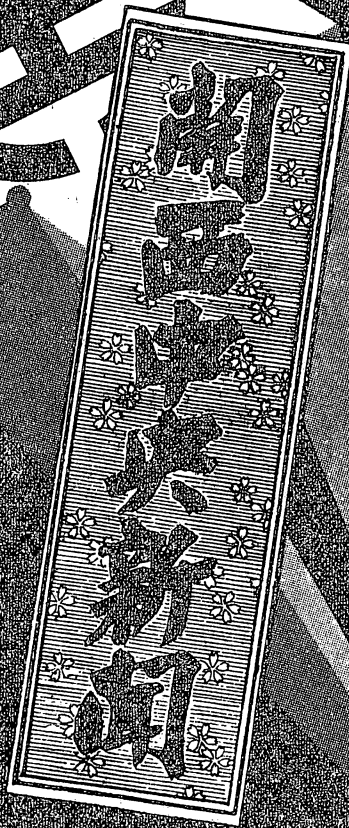
大阪都新聞社

電話北(36)五六五八番

大阪一の

明るいタ刊

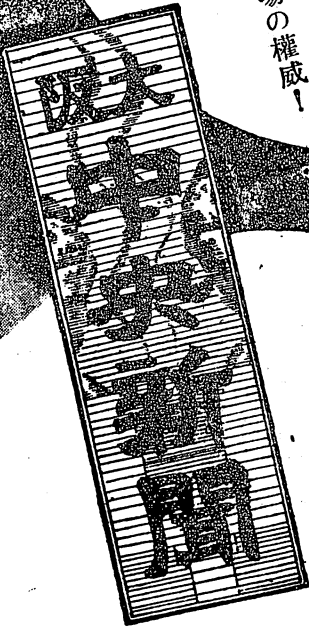
一ヶ月 金五拾銭



どこの家庭でも
ひつぱり刷

本社 大阪西区京町橋

關西唯一の經濟新聞！
我が國證券市場の權威！



朗かな書休みの好伴侶！
我國最初の畫刊新聞

株式會社 大阪經濟新聞社

大阪・東區・北濱
電話代表北濱一〇〇番

賀 正

實益記事滿載！
趣味讀物充溢！



大阪市東區北濱二丁目卅一

電話北濱②

七五五
五二二
五六六
七七大
番番番

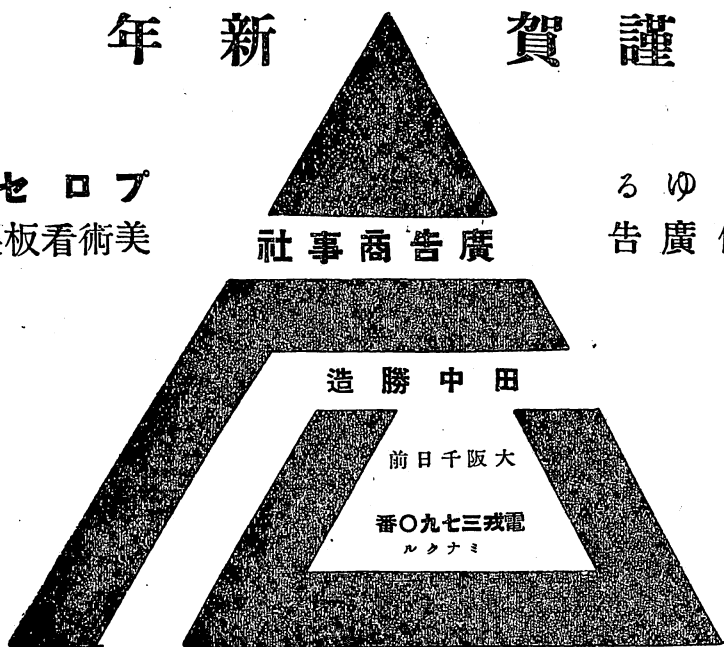
錢貳金部一・頁四刊夕

年 新 賀 謹

スセロブ
作製板看術美

社事商告廣

るゆらあ
告廣傳宣



鮪 廣 末

— 前 座 天 辨 ・ 堀 頓 道 —

芝居・映畫の
御見物の
通りがかりに
御立寄り
願ひます
鯛・鯖の昆布巻は
自慢もので
ございます
御土産入念に
調進いたします

電話南二〇六〇番

謹 賀 新 年

看板と商業美術一般

津 村 英 夫

大阪市西成區辰己通二ノ三六
電話天下茶屋三六七八番

看板裝飾

ウ エ ム ラ 研 造 社

戎橋電停前
電話南五一六二番

福 田 寫 真 店

南 區 笠 屋 町
電 南 一 五 九



謹
賀
新
年



社長 越智 南海

大阪市北區空心中一丁目
電話代表堀川(35)五二五二番

支店 東京・神戸・奈良

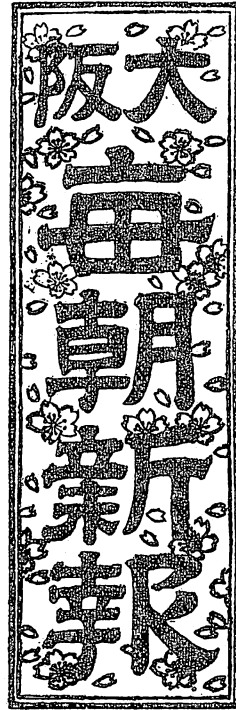
大阪
今日新聞

◇ 唯一の日本主義新聞
 ◇ 堂々の筆陣痛快無比の新聞
 ◇ 明るく朗らかな新聞
 ◇ キビくとも氣持好き新聞
 ◇ 特種満載興味横溢の新聞

大坂今日新聞社社長 笹川春二

大阪市東区北一丁目二八番
 電話北一四〇二・四〇六〇・五〇三〇・五〇一四

謹
賀
新
年



社 會 式 株

大 阪 每 日 朝 新 報 社

七二ノ一北島福上區花此市阪大
番〇〇五三④島福表代話電
番五〇二五・番三九六④島福
番〇六二〇四阪内座替攝
號二十二局田野西函書私

謹
賀
正
新

大 阪 稽 古 所
玉 屋 町
水 野 方 (清 水 町 交 叉 點 西 入 南 側)

梅 若 流

天

野

梅

徑

京 都 稽 古 所

東 竹 屋 町 六 〇 (丸 太 町 新 道 南 入)

〔筆陣堂々天下無敵〕

〔正戰勇鬪是日本一〕

〔生氣潑刺躍動猛進〕

〔全紙悉熱炎之結昌〕

〔名實共年中無休刊〕

日本唯一

〔ドコにも他に
ありません〕

錦城 米田誠夫經營

夕刊
大正日日新聞



〔武勳の大將・筆陣の大正〕
〔銃後の活力素・慰安の糧〕

大正市東區北濱四丁目六番地

大正日日新聞社

電話番九四一
番〇八八
番壹八〇
番八〇三
番七八九
番〇七二
番六四四
番七四一
番八四一
番八四一
番八四一
番八四一

(23) 電話北濱

番七八九二五阪穴座日替攝

謹
賀
新
年



中
外
商
業
新
報
社
經
營

大
阪
北
濱

謹賀新年

中央市場新聞

一部二錢

一月五十錢

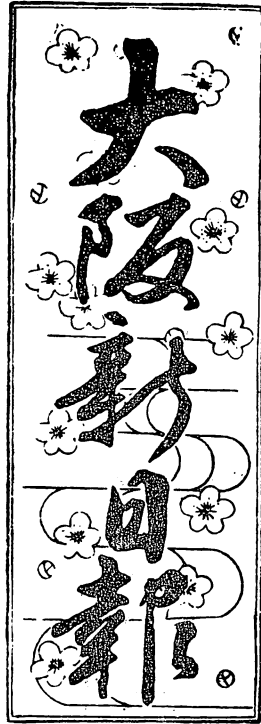
大阪市此花區大野町一丁目

中央市場新聞社

電話土佐堀

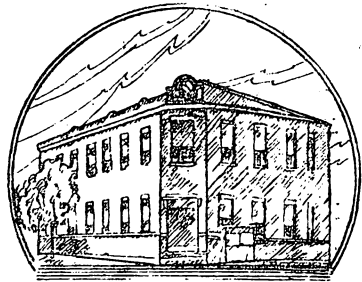
七七七
一七七
六七七
〇八七
番番番

謹賀戰捷の新春



(定價)

一	部	二	錢
一	ヶ月	五	錢
郵	稅	十	錢



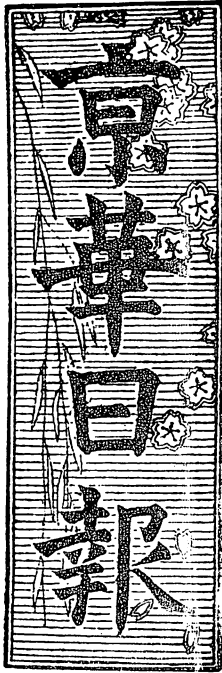
發行所

大阪市此花區上福島南一丁目

大阪新日報社

電話福島④ 260番 261番 262番

創刊 明治三十三年
號數 壹萬參千貳百號



百萬京都市民の意氣と情藻とにピッタリ合
つた新聞は唯一つ本紙あるだけです。本紙
の廣告が頗る効果的なのは其ためです。

夕刊 四頁

定價 四十錢

京都市丸太町寺町東入ル

電

組 織 株 式 會 社
資 本 金 貳 百 萬 圓
創 立 明 治 三 十 四 年 七 月 一 日
取 報 告 年 額 貳 千 萬 圓 以 上
◎ 東 京 大 阪 全 國 各 新 聞 記 事 中 廣 告 特 約
◎ 特 約 取 引 內 外 五 百 余 社
◎ 新 聞 雜 誌
◎ 社 團 法 人 同 盟 通 信 社 及 姉 妹 會 社
東 京 本 社 日 本 電 報 通 信 社
名 古 屋 電 通 名 古 屋 支 社
上 海 · 天 津 · 北 京 · 電 通 廣 告 公 司

通

營業種目

- 營業種目
- ◎ 全國、新聞、雜誌宣傳廣告代理取扱
 - ◎ 圖案、文案、意匠作製
 - ◎ 廣告統計通信
 - ◎ 活動寫真の撮影披露
 - ◎ 各種商業寫真
 - ◎ 新聞紙、新聞廣告部、廣告研究、日本電報、英文、日本文、英文、月報、選集、月報、選集、大圖、伊太利大圖等刊物の發行
 - ◎ 紙型、寫真、凸版、各種製版印刷
 - ◎ 各種備物計劃立案
 - ◎ 各種廣告宣傳企劃

(通電稱略)

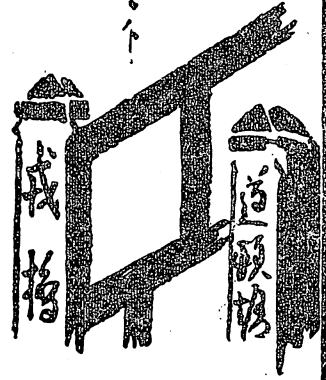


目丁二島之中區北市阪大

社信通報電阪大

一 一 九 九 九 九 五 五 北 電
九 九 九
八 七 六 四 三 二 一 六 五 濱 話

魚川野 調味料
 魚川野 調味料
 魚川野 調味料



電話南
 四八一〇
 四八四二

御食事は

し
ら
も
や

うなぎ蒲焼
海川魚一品料理

出前
急行

ま
むし
鰻

道道千
頻頻口
堀堀前
・
相中
合座南
橋前通

金鶏印 罐詰 二大製品

- 1、純良精選の牛肉
で御座います
- 1、不意の御來客に
- 1、御酒ビールの御女に
- 1、キャンピングに
- 1、ハイキングに
- 1、各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1、キンケイ印を御指定下さい



洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式會社 横山商店

藝文・小説・演劇・小説
美 類 通

森 の ほ の 監 修

第 十 四 年 一 月 號

美

藝術の對象は眞理ではない

眞理は科學に求めるがいい

文學に眞理を求めてはならない

文學は美のみを對象とする

美以外を對象とはなし得ない

—アナトール・フランス—



春狂言と大近松

木谷蓬吟

大近松の戯曲は時代物世話物を合せて百數編ある（脚本を除く、）其中から春の季節に屬する作品を選び出して見ると、作の全部が春季になつてゐるもの、謂はゞ純粹な春狂言と見られるものは、四編に過ぎない。しかし作品の一部分に春の季節を採り入れた準春狂言と云つたものは、ざつと二十編はあらうと思ふ。

四編の春狂言と云ふのは、「雪女五枚羽子板」「山崎與二兵衛壽門松」「夕霧阿波の鳴渡」「傾城反魂香」であるが、右のうち反魂香を除いた三編は初春、お正月狂言として描かれたものである。

中にも「雪女五枚羽子板」は、屈指の長編であるのに、全編お正月の色彩一式で描き上げられてゐるのは珍しく、そこに又、作者と見物の興味の中心があつたらしい。登場の主要

人物は、藤内太郎、次郎、三郎、四郎、五郎、と呼ぶ武道の五人兄弟に、中川、玉椿、小晒、琵琶姫、をだまきと云ふ貞女烈女賢女の五美人を配合して錦上華を添へてゐる。五人の兄弟は文武を兼ね、めいゝに、笛、小鼓、大鼓太鼓、亂舞の得意藝を持つてゐる、これが隨所に用ひられて、此狂言を著るしく音楽化させてゐる。大詰の大合戦の最中に兄弟揃ふて各自の藝術を發揮しながら盛んに敵軍を打ち破る愉快な場面も見せてくれる。戦争は藝術なりと云ふ日本獨歩の軍人精神が舞臺化された好標本である。

其他、雑多の人物が登場して多種多様の趣を添へてゐるが、それ以上に各場々々の變化轉遷がなかくに目まぐるしい。全編を上中下の三巻とし、各巻が又數場に分けられてゐる。先づ上の巻を見るに、正月三日の夜更け、虎の門の驅落

者の狼藉から、赤沼邸の大酒宴、初春厄拂ひの餘興があり、雪中に凍死の雪女の亡靈が現はれる、忠臣の諫言、義士の哀別で、ヤツミ上の巻がすむと、中巻では、白梅咲く本阿彌の露次の外で、六方ぶりの大黒舞の所作があり、娘の羽子つき、兄弟喧嘩、女の男装鞆入、文作系圖の諧謔、女丈夫の奮闘と、轉々して下の巻に入り、將軍の道行、音楽入りの大戦争に及んで大團圓となる。これが總て正月松の内の出来事に脚色され、初春の行事や風習や式法から、俗樂、俚謡の類を豊富に盛り込み、初春情調を漂はせた上に、上中下の各巻の冒頭には、いづれも、延寶頃の上方劇壇を風靡した嵐三右衛門（顔見世興行の創始者）の六方狂言として名高い「藤内だんじり出端」の文と音楽を添へて、いやが上にも華やかに音楽化させてゐる點、作者の意圖した此戯曲の急所であることがハッキリ印象される。

此作品の内容は別問題として、舞臺技巧の優れたこと、特に變轉配置の巧さ、音楽味の饒かさに於て、近松作品の異彩である。「聲曲類纂」では、國性爺と會我會稽山とを合せて時代物の三傑作と推奨してゐる。この評價には異論はあるが、兎に角、それ程に古人の稱讚を博したことは、當時の大衆を魅了した證據にはなると思ふ。

こゝに野心的な作家があつて、此戯曲をうまく料理鹽梅して新しい組上に載せるなら、歌舞伎レヴュー、樂劇として、案外面白いものが生れるのではないかと考へて居る。

次に「山崎與二兵衛壽門松」がある。雪女が「羽子板」で正月を利かせ、これは「門松」で説明してゐる通り、新町の初春、正月大紋日の廓風景から始まつて、その春の暮、再び新町井筒屋で吾妻請け出す黄金の雨を降らすまで、長閑な春風としめやかな春雨とで色づけられた二番目物の上乗である。取りわけて傑作は山崎淨閑の住家であるが、これは先代片岡仁左衛門の得意の出し物、親淨閑の人情味で評判の一幕であつたから、今更紹介するまでもないが、大阪商人の家庭生活や、金錢に對する觀念とか、商業道德とか、商人の心の底に秘められた人情なき云つた、六つかしい問題を採り上げて、それに文學の衣裳を着せ、大衆向きの面白いお芝居として、我々に遺してくれた。兎角代用品を狙ふことに忙しい大阪劇壇は、こんな手製の寶物をさへ忘れて居る。

春狂言の「夕霧阿波の鳴渡」は、吉田屋の餅搗き日、紙子姿の伊左衛門は誰れ知らぬ者もない筈、次の場の上本町平岡左近の借座敷も、原作に忠實な舞臺を、近年ちよい／＼見られるが、切の扇屋内、夕霧臨終の場は人形芝居でも一向に現

はれない。これは物淋しい陰氣な場面の爲めでもあらうが、痛々しい夕霧の最期、伊左衛門父子との別れ、相の山節の哀愁、扇屋夫婦の親切、頼りない醫者なごを出して、行く春の廓の一面を、詩趣深くスケッチした名品、むげに棄てるのは残り多い気がする。しかし、こゝに夕霧役の名優が出て來ない限り、文章だけで讀んで済まして置く可きものかも知れない。

吃の又平で知られて居る「傾城反魂香」も全卷春の世界に描寫されて居り、又平名畫の條は春の夜の出來事になつてゐる。なればこそ石に畫像が抜けて出たり、繪の虎が藪から首を出しても、さして不調和な感觸を與へないのである。それを畫間にまはした此頃の舞臺面では、此場で一等肝腎な「氣分」を壞すこと甚だ大、芝居と季節の大切さは此處にある。修理之助に手燭を持たせ、又平たちに提灯を持たせ、名畫のくだりも春の夜の朧な氣分の中でありたいとは、原作尊重論者の理窟。

この作品の力點は、又平以外に、遣手のお宮と狩野元信の情話に置かれてゐる。京は六條廓の大門、櫻の下の死骸檢分から揚屋の段、元信北野の浪宅に、お宮の死靈が幻影と顯れ「三熊野かけろふ姿」の怪奇凄婉な景事模様の大舞臺を描き

出す。元信の筆にした熊野三山の襖の畫面を踏んで、亡靈と元信とが揃への姿で參詣するといふ奇構が、大に當つたものらしい。舞臺面も新味があり文章も凝つたものだが、相當長い。カット宜しきを得ば道頓堀へでも、四つ橋へでも、持つて行けやう。

以上の他、準春狂言のうちから、春を背景に持つ一幕物を抜いて見る。

「井筒業平河内通」の長谷寺、これは既に大正五年の東京歌舞伎座で歌右衛門で上場されたから別として、「兼好法師物見車」の清水寺舞臺、「本領會我」の女ばかりの鶴ヶ岡の花見、「門出八島」の屋島の浦、嗣信忠信の友愛物語、「東山子日遊」の銀閣寺櫻狩の女六方、「文武五人男」の喜劇、「春雨の羅生門」なき、此等は多少の筆加減で、相當一幕物として復活の可能性があるのであるまいかと思ふてゐる。

「兼好法師物見車」は「碁盤太平記」と、二部作の初作で、後の忠臣藏の生みの親に當る。淺野内匠頭を鹽谷判官に、吉良上野介を高野師直なき變へたのは此戯曲が始めである。

京の清水寺舞臺の場は、本來は夏であるのを、春の櫻の花盛りに見て、五色の絹の造り花で飾らせ、高野師直、藥師寺治良左衛門、鹽谷判官、顔世御前（此作では無名）が登場。

いろく葛籬あつて、師直が工藤祐經、薬師寺が朝比奈三郎判官が曾我十郎、顔世が大磯の虎御前といふ風に「和田酒盛」の振事劇に轉じ、舞臺の繪馬の畫になぞらへての問答から、草摺引、石段での大立廻りがある。錦繪を展けて見る絢爛な一幕、忠臣藏に曾我の二大狂言を緋ひまぜにして、華々しい賑やかな勇ましい歌舞伎情緒を漲らせてゐる。勿論理窟もない譯もない綺語劇である。

「本領曾我」の鶴ヶ岡花見の場は、和田義盛妻女の發企で、鎌倉九十三騎の細君ばかりを集めての花見の饗宴、「鏡山」以上の女ばかりの珍しい舞臺、中に三組の女同士の格闘さへ湧き上がるほど、勇敢な女武勇傳の一齣。特に女方俳優に恵まれてゐる大阪劇壇に云ひ、時局下春芝居の開幕劇として、お誂へ向きかも知れない。

山崎與
次兵衛 壽門松の實説

名題に示す山崎與兵衛は攝州山本村の豪家坂上與次右衛門の事であるとも云ひ、また淀屋辰五郎とも云ふ。あひ方の女郎は與次右衛門の方は新町富士屋の抱へ吾妻、淀屋の方は茨木屋の吾妻、與次兵衛の父淨閑は連歌師山崎宗鑑なもちつたのであり、離與平を油賣さしたのは、その宗鑑の油賣の歌の文句から思ひ付いたのだと云ふ。そして離與平が吾妻を見染める趣向の出所は、灰屋稻益の妾となつた六條の名妓吉野に懸想した鍛冶屋仁藏の話と、河村瑞軒が材木で莫大な利益を得た話を取合せたものであると云はれる。

大阪青年歌舞伎の

擁立を望む

額 田 六 福

今更事新しく云ふ事でもないが、舊く川上の新派劇、今の新派の濫觴となつた成美團、やゝ近く新國劇、更に前進座が眞に經濟的の基礎を得るに至つたのは、大阪での興行の成功であること傳へられてゐる。曾我家五郎一座、十吾一座、梅澤昇や金井修が今日をなしたのも、大阪を中心とする一つの關西文化の力である。寶塚は云はずもがな。すべて今日新興勢力の中心となつてゐる劇團の殆ど全部が大阪に於いて發祥してゐる。この事は輕々に見のがす事の出來ぬ事實である。

東京方に云はせるに『それは關西人の文化が低くて、鑑賞眼が淺いか

らだ』と。しかし、一方から云ふと『東京の様にうるさい小姑達がうよくくしてはどうもならん』
とも云はれる。

議論はどつちでもいゝ。事實は事實だ。大阪と云ふ土地は日本の芝居の温床である。こゝに種を蒔かれた物は、前に云ふ様に殆ど完全に發芽し、成育して來た。

たゞ、不幸にして歌舞伎畑の方は近來不作つゞきであるらしい。第一劇場もうまくゆかなかつたし、鼎會もその後の活動を停止して了つてゐるのは遺憾である。すべて新しきものが育つのに、舊き歌舞伎が思ふ様にならぬのは妙である。その原因が那邊にあるか、私達にはよく判らぬ。が、一つそれをつきつめて研究されて、その弊があればのぞいて、大阪劇壇を背負つて立つ可き若人達を集めて、活潑な運動を開始されたらどうか、新しい仕事に常に理解のある大阪人は、必ず大いに後援を惜まないであらうと思ふ。又、永田衡吉君や我々の様な關西方面に故郷を持つ者も、大いに力を添へる事が出來やうと思つてゐる。

綺堂先生
芝居談義

森 の ほ の 編

初春と會我

昔から江戸三座の吉例で、初春狂言には會我に因んだものが何か一番ぐらゐる必ず出たものです。それを私達は初春の芝居らしくて好いと思つた。併しさう感じるのは、もう私ぐらゐの年配の者で、若い人達が「會我」「初春」を結び付けて考へることは難しいです。いや、さういふ私自身も難しくなつて來てゐます。私達は子供の時から習慣で、會我を云へば何んもなく初春らしい氣分を覺へるやうに育てられて來たのですが、さういふ因習の力が段々薄くなつて來た今日では、「會我」が春で「菅原」が秋だといふやうな差別も自然無くなつてしまひました。まして若い人達には、「會我」も「菅原」も別に頓着はありません。

「會我」なきは因習以外に殆んど何んの理窟も無いものです。若い人達が何んの興味も感じ得ないのは當然です。

今後單に一種の古典劇として存在するかも知れませんが、春狂言としての「會我」の生命はもう無いと思つていゝでせう。

復讐を主眼としてゐる會我や赤穂義士は封建時代には讚美されても、時代の推移と共に自然衰へて行く性質を持つてゐます。それに赤穂義士の方には『假名手本忠臣藏』といふ代表作がありますが、會我兄弟の方にはそれ程の作がありません。會我も赤穂義士も扱ひ様に因つては、無論新しい芝居も出來ませう。併し在來の會我狂言や、「忠臣藏」はもう餘りに古臭いと思ひます。

寶物の詮議

夏が來るに、昔はごこかの芝居で「伊勢音頭」がきつゝ出たものです。春の「野晒悟助」、夏の「伊勢音頭」、私はどちらも嫌ひです。「野晒」の方はまだお静といふ娘で多少生きてゐるが、「

伊勢音頭」ミ来てはさう考へても同感出来ません。「夏祭」も感服しないが、それでも「伊勢音頭」よりは好い。貢の水際立つた姿を見る以外に何んの感興も惹かないのは「伊勢音頭」ミいふ狂言です。近頃は二見の追ッ掛けから油屋の殺しだけで、太々講の場なきは出さないから少しは助かります。

處で、この狂言に限らず、刀ミ寶物の詮議は江戸時代の芝居の附きものですが、かういふ事はこの時代に有りさうなことで、實は無さうなことで、銘刀や寶物の紛失は、無論その家ミしては大事件でせうが、それがため身を襲して詮議するなきいふことは先づ有りさうもない事です、既にそれを紛失させたさいふ罪がある以上、それを探して来たから云つて、罪が消える譯のものではない。いかに江戸時代の人間でも、さう單純な理窟ばかりでは通らない。それを知りつ、昔の芝居や講談で屢々それを繰返してゐるの

はさういふ譯か、ミ考へて見るミ、先づ第一に、世間に在りさうなことを仕組むミ面倒なので、(殊に武家に對して面倒が起り易いので)成るべく世間に無さうな事を撰ばなければならぬ。有りさうで、實は無さうな事これが最も妙であるさいふ譯で、先づ銘刀や寶物の詮議が始まる。

次に脚色の變化をつける必要上、武士を浪人にしたり、町人にしたりする武士が浪人する原因は澤山あるが、成るべく世間に有りさうもないことを作らなければならぬ。そこで、例の銘刀が掬り換へられたり、茶入れや色紙が紛失する。そしてそれを探す爲に武士は浪人する。かうして置けば何處からも叱られる氣つかひは無い。また、芝居の大詰へ行つて、その浪人を歸參させるのにも、まことに都合が好い。例の細川の血達磨なきが其例で、あれは御朱印を憚つて達磨の一軸ミしたのです、併し實はその御朱印すら疑はしい。あれは、中川を大川に改めたの

で大阪城の番士中川帶刀たこまきだらうと思ふ
中川帶刀は、寛文五年の正月、大阪城の天守櫓が雷火に焚かれた時、大事の書類を取り出しに行つて、櫓ミ共に焼け落ちた有名な人物で、其子は四代將軍家綱から千石の加増を受けたのです。私はこれを三幕の芝居に仕組みました。昭和三年二月歌舞伎座で左團次の演じた「雷火」ミ云ふのがそれです。

お岩稲荷

「四谷怪談」ミいふものも私は興味を持ってない。私が亡父に聞いたのにはお岩の事實は講談や芝居ミは正反對で、例の怪談なき跡かたも無いことです。
お岩ミ夫田宮何某ミは生活難から一旦夫婦別れをし、お岩は他家へ奉公するこゝになつて家を立退く時、屋敷内の稲荷に願掛けして、再び夫婦ミなれるやうに祈つた。處がその後、二人は幸運に向ひ、目出度く同棲するこゝになり、これも稲荷の御利益ミ思つて立派な祭をしたのが世間に擴まつたのださうで、芝居は餘りに嘘らしい。



歌舞伎の中の道化フアース

濱 村 米 藏

三枚目の活躍する芝居は、我が歌舞伎には掃いて捨てる程あるが Farse ミ云へる程の傑れた脚本は無い。残念だが無い。

岡本綺堂氏の新脚本には、「小栗栖の長兵衛」ミか、「べぼうの始」ミか、「江戸名所圖繪」、松居松翁氏には「太閤ミ淀君」池田大伍氏には「男達ばやり」ミといったやうに本當の意味の喜劇脚本、或は「身替り座禪」「太刀盗人」のやうな能狂言の翻案物も尠くないが、こゝではそれらの新脚本（多くは大正以後の）に就いては何も言はないことにする。

昔からある「膝栗毛」や「八笑人」もこれが日本のフアースだミ見本に出せる品でない。「ちよいのせの善六」（お染に横戀慕する番頭）の部類や「三世相」（地獄巡りのお園六三）のやうな淨瑠璃物も有るにはあるが、餘りに断片的である。結局日本

にはモリエールのやうな喜劇作家、「人間嫌ひ」、のやうな作品は無いといふより仕方がない。併しモリエールのやうな作家が、さうあつちにもこつちにも在るものではない。ない方が本當である。

歌舞伎には文學ミして傑れたフアースは無いが、眼から或は耳から入る印象、さういふスペクタクル的な表現や演出には、かなり佳いものを相當残してゐる。「天下茶屋」の元右衛門ミいふ三枚目ミこのワキ役を、いつの間にか悲劇の主人公にしてしまつた程、この脚本の舞臺的表現は、フアースミしていゝものが傳へられてゐる。

彌助を殺してからの元右衛門の花道の引ッ込み——所謂八方斬りの特殊な型は、人殺しをした元右衛門が何か大きな手で掴まへられるやうな恐怖を感じて、目茶苦茶に刀を振りま

はず、實に奇怪な滑稽の動作である。大膽な臆病を半分々々に持った、笑つて笑へないやうなユーモラスな表現を、この花道の元右衛門の仕草に見出す。部分的、断片的ではあるが、これなきは傑れたファースでなくて何んであらう——。

俗に「法界坊」で通る「隅田川續佛」は、脚本としては支離滅裂で詰らないものだが、芝居としての演出がやはり美事で、歌舞伎の味ひは質量共に限りなく豊富なものである。これも無論世間ではファースミ思つてゐない。私も「法界坊」の全部がファースだなき、奇矯な言葉は吐かない。併しこれも部分的には莫迦に出来ないファースだと思つてゐる。

「法界坊」の舞臺は、演者によつて少しづつ違つた型を持つてゐるが、大體に於て序幕と二幕目の演出がファースミして優れてゐる。序幕でお組と要助の松若が戀物語に夢中なつてゐる間に、法界坊が鯉魚の一軸を釣鐘の幟と掬り換へてこれを後で見せびらかしながら踊るころなきは面白い。それを又一人の敵役(役名はいろいろ)になつてゐる(が床の間の日)の出に松の軸と換へてしまふ。

それから紅絹裏甚三が出て來て、法界坊は自分の戀文を讀み立てられ、衣を頭へ引ッ懸けて下手へ逃げ出す處で印を結び。そこで甚三に掴まつての文句が振るつてゐる。「煙を出

しそこなつて」ミいふので、これは芝居で妖術を使へば煙を出す、その掛煙硝を出しそこなふ、つまり逃げそこなつたの意味である。(優によるミソロリ)ミ這つて花道へ行きかけるのを甚三が呼び留めるので、「ちよつとおしッこに」なぞミも言ふ。)。

次の場での有名な「しめこのうさく」もユーモラスではあるが、殊に幕切が六代目では傑作になる。長九郎から貰つた五十兩を懐にして法界坊が、「喧嘩だく」で出て來る仕出しの間をうろくしてゐる中に、蕎麥屋にぶつかつて鰻鮓を食ひ出す。慌て、咽喉に詰まつて鰻鮓がだらり口からぶらさがる。蕎麥屋が背中を叩く拍子に懐の小判が落ちる。うろたへて小判を口へ入れて「ベッベツ」ミほきだし、目を白黒させて小判の上に坐り、「お代り」ミいふ段取りになるのだが、随分皮肉で面白い。

猿之助のは段四郎譲りで、普通のミ少し變つてゐて、この三圍の合羽干し場がない。従つて「しめこのうさく」は二幕目の土手場へ持ち込んであるから、うぎんを喰ふ處がない。だがお約束の穴堀りは、實に叮嚀にやつて見せる。長九郎の鋤ミ自分の鋏ミを再三取り換へたり、尻振りダンスをやつたり、きはめて賑やかに穴堀る。

かういふ風で、歌舞伎には舞臺の上での部分的な表現、或は一つの演技としてのフアースにかなりいいものがある。所詮、歌舞伎のフアースは他の場合と同じで、立體的な演劇そのものに傑れた藝術が存在する。

市川家の荒事「暫」は毎年の顔見世に吉例として繰返された程、江戸の民衆に親愛の念を抱かせ、限りない昂奮を感じさせたものである。勿論文學的には出來損なひのお伽噺のやうなものであり、思想的に見れば擱まへぎのあると思へばあり、ないと思へばない、ごつちでも一向差支へのないものである。併しこれを舞臺で見る際には、そのさながら天馬空を行くやうな童心的表現のなかに諷刺と譏笑が滾々として溢れるのに驚かすにゐられないだらう。これは全く江戸ツ子のクリエートしたフアースである。

鯨坊主の震齋が一同から「しばらく」を引つたてろ云はれて、真ん中へでゝ來ていふこゝに「さてよ、安請合にでたはでたが、勝手は違ふし力はなし、所詮ただではたちをるまい、さあつて後へは歸られずア鯨にいんではこの胸が、すうまアぬ」ミ伊左衛門の『ゆかりの月』をもぢつた處を唄ひ、「いや我ながら悪い聲だ」ミ恐縮するなき茶氣満點であり、押し出しきも堂々たる幾人かの腹だしが事毎に強がつてゐて

「いよう」ミ云つてひるみ、「やあくく」ミ驚き、「言分あらば」ミきめつけられ、ば、「ない」ミあやまる。何處かに自分等より強い者が居て、いつも頭を押へられてゐるやうな人生で、生きる意志に悩んでゐる者へ、温かい微笑を送るものではなからうか。それからまた善玉達が寶劍を手に入れたミ云つて、ヨイ／＼ヨイミ締めれば、悪玉達も釣込まれて手を締め、氣がついて「おかッせい」ミ頭をかゝへる。何の事はない、一切無差別な愛嬌があつて、あれを見てゐるミ、江戸ツ子の善良さが分るやうな氣がする。この奇想天外の演出になる「暫」は實にフアースの傑作である。そこに普遍的な興味があり、藝術的價值がある。

大阪には「雁のたより」「さんく」の三吉「堤畑の十作」等フアースミ呼んで然るべき物がある。これらも演出が美事である。近頃猿之助が得意の狂言「研辰」も、原作は上方狂言の「敵討噂高松」で、主人公の辰次が三枚目で活躍するが、それもフアースミしては大詰の仇討が奇抜なだけで、それをあれまでにしたのは改作者ミ猿之助ミの力である。

柳川
花形役者

扇雀の満足父の顔が出来
槍持つて扇雀さんの丈が低い
江戸前の啖呵へ守田勘彌の眼

北川
牡丹

成太郎の留守へ無事着く鳩の文
鳩の調練にまぶしがる女形
雨に濕はふ花の成太郎

後藤
千枝

樂屋着で會ふ扇雀のやはらか味
長襦袢だけで鶴之助は女
書拔へきちんと鶴之助すはり

篠田
井窓



事變後の美術家劇

原 田 信 造

日露事變の直後だった。戦争中は銃後の護りで、殊に隱忍苦悶にゐる畫家連が、戦捷の祝賀ミ、畫壇復賑を意味して、畫家芝居をしたが、歴史人物畫の大御所、松本楓湖門下のそれは、頗る大仕掛けなものであつた。楓湖は當時淺草茅町に住み、随分ミ畫壇的勢力をもつて居て、文展審査員なごにも任じられた。『前賢故實』の名著があり且つ有名な淺草寺に所藏される「堀川」御所の御厩喜三太が弓弦を張つてゐる大繪馬を畫いた勤王家で畫家の菊池容齋の門下だから、國粹的で強い日本精神の所有者だった。日露戦捷の、この國威發揚の祝ひには非常な意氣張りで、

塾の前に表看板を立てたり、鬘は淺草馬道の大勝から借入れる、囃子方は明治座の下座に来て貰ふ、一週間前から連日、吉右衛門や米吉（現時藏）の兄弟が来て、稽古をつけるこいふのだから、その大掛りさは想像されやう。畫割背景は、畫家だからお手のものであり、繪絹やの關谷こいふのが大薩摩の自慢で参加する。さて、狂言は、日露戦争、悲劇を一番目とし、水兵（門下の齋藤鷗洲）が召集令を受けて出征するこいふ筋立てで、「大掠渡場」一幕、水兵の父（門下の長谷川可湖）、水兵の妻（門下の田中咄哉州）で、大いに帝國海軍の意氣を昂げ大和魂を見せ、妻は父

と共に銃後を護る軍人の妻としての貞婦道を表徴したもので、大喝采だった。

中幕は、「だんまり」で、小山大月が（楓湖門下現存「院展」同人）辻堂から大百鬘で現はれ、柱卷の見得よろしく太刀を振りかぶる拍子に、辻堂の廂を打ちこわすこいふ勇猛ぶり。田中咄哉州が女順禮で引抜いて平家何の某の娘さある。二番目は喜劇で、紙屑屋ミ池の端の二場で、屑屋の女房連が、門下の速水御舟、小茂田青樹、田中咄哉州（現存）で、屑屋が牛田雞村（現存）。近所の人力車宿から人力車やはつびを借りて来て、舞臺へ引まわし、舞臺から

落ちたりする珍談を續出し、一番目の悲劇はトチル滑稽に、爆笑の賑ひであつたが、此の畫家之居は大評判で、その後ある新年會が、上野公園の常盤華壇に催された時、この一座が買はれたのだから凄いものである。登場の畫家

は、故人ミなつたのも少くないが、故人今人共、後にはいづれも現代の有名畫家であつた。いつの時代にも戦で疲れた後の大役を負ふものは、演劇、美術、音楽でなくてはならない。

拍子木を
素人の打つ
賑やかさ

—古川柳—



洋酒・食料品・罐詰問屋

株式會社

横山商店

創業明治五年

大阪市東區豊後町三番地
電話東94代表三八六五番
振替口座大阪二八四七番



松切と山崎街道

— 神戸松劇の「假名手本忠臣藏」を観て —

菱 田 正 男

最近非常時にふさはしい狂言として「假名手本忠臣藏」が盛んに上演される。忠臣藏なき芝居道では、獨參湯々と言はれてゐるだけに、いつの世になつても繰返し上演されるに不思議はないが、最近の如くあちこちで出るのは時節柄こはいへめづらしい。

従來大序から七段目までが普通の演じ方であつたが、それへ八、九段目がつき、更に討入——引揚こ加はつて、ます／＼面白さが出て來た。それがこの程神戸、名古屋その他で關西歌舞伎(宗十郎加入)で上演された際、珍らしくも二段目がついた。この調子ださや

がて十段目の天川屋も見られやう。

非常時のお蔭で「假名手本忠臣藏」

の本格的上演が見られるやうになつたわけだが、二段目なきは次の進物から喧嘩場の底を割るこはいへ、あつていゝものだ。「寺子屋」における「松玉下屋敷」の如きも亦その一例で、この方は「寺子屋」の前に見せられては「寺子屋」の興味は半減するであらうが、二段目なきそれほゞ邪魔にならぬと思ふ。今後繰返してほしい。然しこれまでも俳優にもよるわけで、今後のやうに、壽三郎の若狭之介、段猿の本藏さなるこ、何がさて義太夫物よりも

むしろ新らしい芝居の出来る兩優だけに、思ひなしか新劇めく。豊田家自身が「新國劇」のやうだとの誰かの蔭口を聞いて、ひきく氣にしてゐたやうだつたが、新國劇はチト酷評だ。然し豊田家自身が歌舞伎狂言化すべく努力してゐる點は充分認められるし、段猿の本藏亦懸命の力演を見せ、久方ぶりの建長寺だけに收獲であつた。

それさ観物は「山崎街道」の延若の定九郎である。いつか竹田出雲の記念興行の時、延若がドテラ姿の定九郎を見せて評判になつたが、その時見のがした私は、こんき神戸へ出たのを幸ひ早

速見に行つた。

最近演じられてゐる定九郎の型が中村仲藏系であり、例のスツキリした姿だが、これが演ぜられるより以前はやはり山賊姿だつたらしい。もつとも演出の如何によつてはあの型であらうが山賊であらうが、さうでもない、わけだが、院本通りなるさ一寸さうは行かぬ。定九郎が手甲、脚絆の旅人姿なればこそ、猪打ち止めたと思ひ込んだ勘平が、死骸に觸つて「旅人」さもいへるし、後の物語での「旅人の死骸」の臺詞も生きる。親與市兵衛を殺したと思ふてゐる勘平には旅人姿の死體をソレと思ひ違へるのも受け取れるし、二刀差してあの眞白い足を出して死んでゐるには、いかに、お主の大事に居合はさぬうろたへ者の勘平でも「變だなア」位感つきさうなものだなきいふ河内家一流の解釋もあつて、この演出さなつたわけ、この方が解釋ばかりでなく

院本から行つても正しい。與市兵衛を追ふて花道からの出、問答、殺し、二ツ玉まで相當面白く見せてくれた。これも收獲の一つである。

そのほか、延若が大星由良之助でク城明け渡しクの際、九寸五分を管めず「根ざしはかくさ」で、淺野家の定紋入りの提灯を小刀で裂いて懐中するやうにしてゐるし、ク駈つけクも、檢視が入つてから腹帯を緩めるやり方で萬事に濫いさころを見せてゐた。またク道行旅路の花犁をいつものやうにク忍傷クのあまにせず、ク城明け渡しクの次にしたのは、扇雀がお輕ミ顔世を兼ねてゐるのミ、宗十郎が判官ミ勘平を兼ねてゐるので顔の塗り替へを考へ、時間を縮めるため、強いて咎める程のこゝでもない。それに六段目が頗る叮嚀だつたし、何かミ話題の多いク忠臣藏クではあつた。

(十三、十二、廿)

天婦羅と佛蘭西料理

喜久屋食堂

道頓堀式橋北詰(75)番 七四八番

特輯 隨筆短文集

私と京都

片岡 我當

片岡の家の吉例としまして元日は京都風の雑煮を作りま
す。これは元祖が京都の人であるからで、その墓は東山通
二條の妙傳寺にございます。これは亡父が発見しましたの
で、その記念の碑が境内に建つてをります。尤も片岡家の
墓は仁王門通川端東入ルミころの法華宗本山頂妙寺にもご
ざいます。

かやうに因縁の深い京都で、今度は始めて正月をするこ
とになりました。除夜の鐘も智恩院か、清水か、兎に角深
い情緒を味へませうし、或は圓山の雪景色も折よく見る
ことが出来やうか、今からそれを楽しみにしてをりま
す。

京の鯛かぶ

澤村 訥升

一昨年(十一年)六月出勤の時のことでございます。二
番目が「切られ與三」で、見染めから見染めの着附の柄が悪いとか、
帯が變だとか、色々御注意がありました、しまひには帯は
新しく切りたてのを持つて来て頂いたり、着附もわざと
まるで違つたもので、嬉しいやうな恥かしいやうな氣持で
ございました。

もう一つ京都で忘れられないのは鯛かぶの味でございます。
あれは全く京都ならではのものです。ございませう。

思ひ出多い京都

坂東 鶴之助

東山、加茂川なき京の山川草木、一つとして私の氣持を
引付けないものはありません。また神社佛閣の古い建物
と舞妓さんとの調和、これも他の土地には求められないも
のでございます。殊に歌舞伎發祥の地であると思へば、一

層ゆかしく懐かしく感じられます。

それからまた舞妓禮讚になつてしまひますが、「ゑり萬」特有の染物、柄、絞り、これを配した舞妓さん藝子さん達のなりは本當に好もうございます。

食べ物も、大阪に劣るごは思はれません。大市のすつぱん、瓢亭のお雑炊、一休庵の野菜料理、西陣常盤の肉なご誠に結構で、思ひ出しても食欲をそゝられます。今度はその京都へ、我當さん訥升さんなご一緒に参れないのが残念でございます。

忠臣藏の役々 中村 扇雀

この度の『忠臣藏』に私の役は判官、勘平、平右衛門でいづれも氣の好い役々でござります。先頃の顔世も件内も初役でござりましたが、今度は皆手がけたものでござります。申しても樂な役ではござりませぬ。ミりわけ判官は昔からやかましく云はれてゐる役で、なか／＼以て難儀な役で存じます。それだけに充分研究してやつてみたい氣も致します。切腹も無論むつかしいのでござりますが、喧嘩場は一層むつかしいので、何ぞぞしてお褒めに預かれるやう

にやりたいと思つてをります。六代目さんの判官は大そうよいご伺つてをりますが、残念ながら私はまだ拜見してをりませぬ。

勘平は成るべく父の型で行きたいと思つてをりますが、時々型を替へてやつてみるのも面白からうご、御ひるきのさる方から申されてをります。私も色々型を替へてやつてみたい氣もせぬではござりませぬが、さてごういふごになりますやら……。平右衛門も父は若い折にいたしたさうでござります。東京では播磨屋さんが大さう面白いやうなお話を承りました。判官、勘平を陰すればこれは陽の方で、派手で得な役でござります。

先日の神戸では私はおかるを勤めました、これは皆様に見て頂きたかつたので、まことに楽しんで勤めました。この外『忠臣藏』では力彌直義、若狭之助、石堂、由良之助をいたしてをりますが、やりさうでやつてをりませぬのが彌五郎、定九郎でござります。すべて『忠臣藏』の役々はこれもこれも相當見せ場がありますので、これもこれもやつてみたい氣がいたします。かういふ點も『忠臣藏』がいつまでも生命を續けてゐるわけか存じます。



忠臣藏の考察

— 五段目より七段目まで —

森 ほ の ほ

五、六段目は併せて一幕二場の挿話である。併しその二つを切放しても、互に立派な藝術的價値は持つてゐる。

五段目で與市兵衛を殺したのは定九郎であり、勘平が過つて撃つたのは與市兵衛ではないこゝを見物は既に知つてしまつてゐる。謂はゞ六段目のシバキの所謂「底」を割つてしまつてゐるのであるが、それが劇の進展にも、舞臺効果にも、何の支障も與へてゐない。のみならず、寧ろ逆用されてゐる形である。即ち二つの犯罪を先づ見物の前に展開して置き、後にその犯罪の錯交から起る悲劇を提示してゐる。かういふ類例は稀でないかも知れないが丁度前以て種明かしをしてから、その巧妙な手品を繰返し見せられた時のやうな感じがするるのである。

さてこの五段目は、内容はさておき演出がすばらしい。云ひ替へれば、院本よりも芝居の方が遙かに優つてゐるのであ

る。人形の定九郎が與市兵衛を幸刺しにしてから念佛ミ題目をゴツチャに唱へて跳ね廻るのも面白いが、掛け稻の中から財布を口に銜へ、與市兵衛の脇腹を刺しながらヌツミ現はれる芝居の定九郎には、効果的な演出の美事さがある。彼には立體的な「動き」の面白さがあり、是には平面的だが、繪畫的の美しさがある。

舞臺装置も黒幕ミ、籤壘ミ、掛稻ミ、松の立木ミだけで簡素だが、繪畫美は反つて充分である。鳴物も鯛笛、忍び三重、本釣り等、至極單純で而も効果的である。殊に猪の出に早笛の鳴物を使つた囃子方の機智に敬服する。

(尤もこの猪の縫ぐるみは餘りに稚拙で何ミかもう少し工夫があつて然るべしだが……)

有名な仲藏創案の定九郎の扮装は寫實的ミの非難があつても、効果的であるこゝは否めない。あの着附の黒、博多帯ミ

サガリの白、大小の鞆の朱、配色の良さは到底昔日の山岡頭中に衣具縞布子のモツサリした扮装とは同日の論でない。

六段目の悲劇を成すものは、總べて正しい錯誤であり、早合點である。勘平自身がさう、母や原、千崎の二人侍もさうである。然しそのかなり無理な錯誤や早合點も、見てゐては左程無理を感じさせぬのは、やはり作者の筆の力なのであらう。

有名な五代目(菊五郎)の勘平の演出は、彼の「いがみの權太」と同じやうに独自の新釋であつて院本の雰圍氣からは寧ろ遠いものであるけれども、そのプランの健實と巧緻と整備と周到とは、所謂東京型の勘平の模範となり標準となつた程、全く秀拔な遺作である。上方型の演出は院本には近いが整然たる點、繪畫的な美しさの點では五代目型に及ばない。なほ上方型は寫實に近づく傾向があるだけ謂はゞ散文的に陥り易い。

兎も角も、この五六の二段は同じ作者の櫻丸や權太の腹切りよりも挿話的に纏まつた一篇の時代世話劇である。

七つ目の「茶屋場」が『大矢數四十七本』の脚本にも、主役大星に扮した宗十郎の藝にも負ふ所が多いことは、既に「いろは評林」以來云はれてゐる處である。その程度までの影響を受けてゐるかは未だ知らないが、兎に角他の段と比較して構成の違つてゐることは認められる。或は脚本をそのまゝ

この一段へ嵌め込んだのではないかさへ想はれるのである。幕明きの「花に遊ばゞ」の騒ぎ唄、文の件の「父よ母よ」の獨吟、幕切れの「加茂川で水雑炊を食はせい」「ハア」「行け」のセリフ留めなき何となく歌舞伎の匂ひをおほえるのである。

また脚本からの轉用があるか無いかは措いても、一段を通じて會話が非常に多く、而かもその會話は上手に運ばれてをり、辭句も亦滑らかなものである。亭主と九大夫、由良之助と平右衛門、九大夫と由良之助、おかると由良之助、平右衛門とおかる等の對話の如きが即ちそれだが、殊におかると由良之助との分が優れてゐる。總じて簡潔でテンポも早く、殊に文の件で二人が互に疊み掛けて行くセリフには間髪を入れぬものがある。

またそのセリフの媒となる九ツ梯子の利用の如きも、それまでの段取りに無理がないのみでなく、後の一大事への進展を約束しつゝ、また一つは由良之助の半醉半醒のやうなカムフラージュした遊蕩氣分を表示しつゝ、役者の「動き」に、舞台情趣の轉換に勢からぬ効果を與へてゐる。これもさうであるが、なほ演出として面白いのは、九大夫の鶴脱げの件で鶴籠やが身代りの石を見て「コリヤコレい……」と云ひかけるに伴内が「シイ」を制止する、下座がそれへ「ししらでん」の「冠せてゆく、あの歌舞伎らしい洒落や、(卅二頁に續く)



劇化された能狂言

天野梅徑

勸進帳、船辨慶、橋辨慶、紅葉狩、土蜘蛛、道成寺なきのやうに、能をそのまま、或は能の題材から劇化したたり、舞踊化したたりしたものはかなりの數に上つてをります。かやうに能が歌舞伎に與へた影響は甚だ大きいのでありますが、これと同じやうに狂言も尠からず歌舞伎に影響を與へてゐるのであります。芝居の方ではこれを「狂言ざり」或は「狂言ざりの所作」なきと呼んでゐるやうであります。思ひ浮んだ處を計上しましても三十餘種に及んでをります。それを區分します、次のやうに――

- 狂言そのままを劇化し、舞踊化したもの。一
- 狂言の主題或は題材を採つて劇化し、舞踊化したもの。二
- 狂言の一部分を劇或は舞踊の一部分に挿入したもの。三

この三つにならうかと思ひます。その中でも一の部類に這

入るものが一番多いのでありますが、更にこの中にも、一つの狂言を脚色し按排したものと、二種以上の狂言を組合せたものさがあるのであります。

(第一類)

- 三番叟 末廣がり 宗論 釣狐(こんくわい)
- 素袍落 棒しばり 釣女 靱猿(花舞臺靱猿)
- 二人袴 花見座頭 武悪 墨塗(墨塗女)
- 業平餅 寢音曲 茶壺 牛盗人(御牛)
- 蚊相撲 髭櫓 御田 金藤左衛門(女山立)

(第二類)

- 身替り座禪(花子、石神)
- 閻魔 (餌差十五、八尾、朝比奈、政頼)
- 悪太郎 (悪坊、悪太郎)
- 太刀盗人 (長光、太刀奪)

さてこれらを一々解説することは讀者を煩はすに過ぎませんから、かい摘まんでざつと述べることにしませう。先づ第一類から始めます。

三番叟は狂言中でも許し物ですが、これは儀式的で他の狂言とは別個のもので、併し狂言から出てゐる以上、たゞひ嚴肅な「翁」の中に挿入されて、同じく儀式的なものになつてゐるにもせよ、本質的に明朗でユーモラスであるべき筈で、芝居の「舌出シ三番」や「操り三番」、「二人三番」はさういふ氣分が出てゐますが、能狂言に一番近い「壽式三番」は儀式の嚴肅さ莊重さにみらはれてゐる傾がありまして、狂言の三番ほどのユーモラスな味が姿態にも、動きにもありません。これは間違つてゐると思ひますので、枝葉に亘りますが一寸申し添へたわけであります。

「末廣がり」には傘をさすなる春日山の小唄と連れ舞があり「素袍落」には那須（與市の扇的）の語があり、「二人袴」には中心興味の笑止千萬な連れ舞があり、いづれも目出度いもので、殊に「末廣がり」は脇狂言であります。宗旨争ひを揶揄した「宗論」は「石橋」の間として用ゐられます。反對に能の方で「加茂」の替間である「御田」は、舞踊としては獨立したものであります。これには若い田植女の合唱のあるのが狂言でも珍らしいのであります。

「釣狐」は能の傳授物で大會の折なきでなくては出ないもの

であります。九代目團十郎はこの難物を演じて美事であつたといひます。古い所作にはこの趣向を會我へ持ち込んだものもあります。「釣女」は芝居では太郎冠者の釣上げる醜女は一人ですが、能では幾人もいろいろの醜女が出るのが一層愉快ですし、賑やかでもあります。「鞆猿」の猿曳が猿と別れを惜しむ件は、芝居よりも能の方が涙を催させるのは不思議なくらゐるであります。「花舞臺霞猿曳」は狂言の主題に依りながらも全く別な、芝居らしい華やかな舞踊劇になつてゐます。大名を女にしたのなごもいゝ趣向と思ひますし、踊の振附も變化が多く節附と共に結構なものであります。

「花見座頭」は「月見座頭」に似寄つた趣向の物であります。風趣も内容もそれには劣つてゐます。明治の初期に上演されたやうですが、其後上演を見ません。「武悪」はこれらに比べるに、すつと劇的なもので、主君の勳氣に觸れた武悪を仲の好い朋輩の太郎冠者が、だまし討ちにしようとする處がヤマであります。故段四郎に書卸されましたが、今の猿之助も演じて好評を博しました。「墨塗女」は壽美藏改名當時の書卸しもので、「業平餅」も亦壽美藏が主演してをります。但しこれは芝居よりも能の方に、上品な皮肉な滑稽味がより多く感ぜられます。「寢音曲」は謡ひものに上手な吉右衛門の爲に書卸されました。「茶壺」はたしか三津五郎も時藏なきも演じてをります。菊五郎の得意とする彼の「太刀盗人」

ミ同巧異曲のものであります。

「牛盗人」は原據は支那のやうな氣もしますし、外國種のもうな感じもします。親が牛を盗んだのを子が訴人し、恩賞には親の命を助けて貰ふさいふのが落手ですが、前に述べた「靱猿」ミ同じやうに一寸涙ぐましくなる狂言で、多くの狂言中でも珍らしい作風のものであります。之に反して「蚊相撲」、「髭櫓」はナンセンス味たつぷりのものですが、これらは能の方が寧ろ愉しめるやうです。蚊ミ人間ミの争闘も、美髯を防衛する爲に櫓を設けるのも共に奇抜ですが、何ミなく前者の方により多くの皮肉、嘲笑が見えて愉快であります。

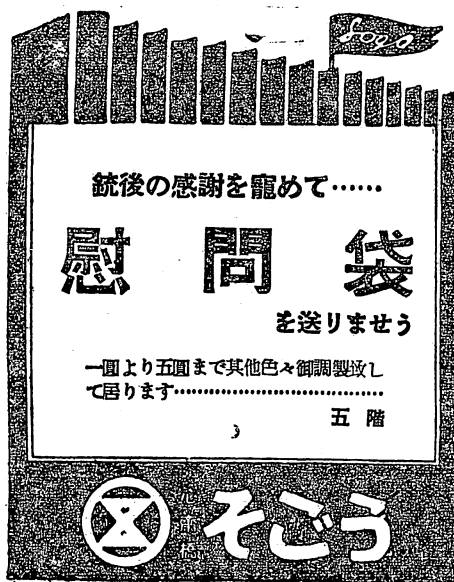
「金藤左衛門」は女天下を冷笑したもので、「髭櫓」ミ同じく花街の舞踊會で上演されました。

これで第一類を終るこゝし、第二類に移りませう。前に掲げた四つの作は、第一類の「棒しばり」なご同じ頃に新作され、たしか「悪太郎」以外はすべて故岡村柿紅氏の筆に成つたので、演者は六代目菊五郎の専賣物であります。

これらの作は前に記した通り二つ以上の狂言を巧みに組合せて脚色されてをります。元來、狂言には類似の構想があるので、それを利用されたわけであります。「身替り座禪」は座禪堂へ身替りに太郎冠者を残し、主人公自身は女の許へ通ふさいふ大名氣質を寫したものの。「閻魔」は宗教の力で人間が地獄へ墮ちるこゝが少く、それが爲に地獄に飢饉が到來する皮肉、その地獄へ墮ちた勇猛な朝比奈は閻魔大王を征服し

て淨土へ轉じるさいふ顛倒の滑稽。「悪太郎」は至つて大酒で、而かも酒癖の悪い男が伯父の機智に依つて翻然と悔悟するもの。「太刀盗人」は都會の惡漢が田舎人の太刀を掠めようとして、反つて化の皮を剥かれる痛快なものであります。すべて當時の世相、風俗が描かれてゐて、今日それらを想像し得るので二重の興味があるさいふわけであります。

この外、芝居へ移入されたものでは、題名を忘れましたが會我家の狂言の一つとなつた「船渡聲」、能の「橋辨慶」の替間である伎師を擗り込んだ如き間狂言もありますが、今はこれで一先づ話を打切るこゝに致します。



銃後の感謝を寵めて……

慰問袋

を送りませう

一圓より五圓まで其他色々御調製致して居ります……………

五階

⊗ そごう

川柳
芝居雪月花

花と吹雪と隔つれど同じ紙
雪の段蠟燭へ降りきな臭し
残る雪布子へ入れる道具方
大雪も芝居で降るは四角也
三角の雪年代記には乗らず
紙にて事足る芝居の雪月花
張抜の月くもの巢の絶間より
出る月は下り入る月上るなり



春は角兵衛獅子になつて

人情クラフ

沼

兵

十

鴨介は、舊の二十九日から風邪を胃ひて、正月の二日ださいふのに穢い二階の萬年床にもぐり込んで龜の子のやうに首だけ出して考へてゐた。だが露地の中で正月を騒ぐ子供の喧聲で、その考へは一つもましまらなかつた。いや鴨介のこの考へは、さう急にましまる必要のない考へだつた。

獨身者の二階借り暮しではあるが、暮の中に買ひ込んだうすツべらなこの餅が無造作な形に切られて、化粧品の空箱の中に入つてゐる。鴨介はそれを寢床の中から手を延しては身近かの火鉢の上で焼いて、また考へこんだ。

今年はもう二十五だ、早い者はもう子供が出来てゐる、ミ故郷の母親から手紙が來た事を考へるミ、さすがの鴨

介も慚愧にたへなかつた。

暮の十五日に係長ミ喧嘩をして、小さな新聞社ではあるが、その校正係を鹹になつた鴨介は、今年はさういふ風にこの世の中を泳がうかミ考へてゐるのだつた。

外は正月氣分で賑かだ。隣の梅干婆さんまでが外に出て羽子をついてゐる。齒の抜けた口邊から漏れる聲が蒼蠅く鴨介の耳に入つた。しかし鴨介はこの梅干婆さんのしやがれ聲を妙な神經で聞き入る持合せがあつた。譯はかうだ、婆さんには今年十八、ミ云つても明けて十九になるハ一ちゃんさいふ娘がゐるた。鴨介も今年は二十五、このハ一ちゃんを心憎からず思つてゐたのだつた。だからこの長屋の蒼蠅さ型の婆

さんでも、ハ一ちゃんの爲には鴨介もこの婆さんに一步譲つてゐた以爲、鴨介には係長より怖い存在だつた。

近くを走る郊外電車も暮からの忙しさで、軌る音もかすんでゐた。その音にWつて角兵衛獅子の早間の太鼓の音が聞えて來た。もう露地のなかに入つて來たのだらう。羽子つく音もやんで一トしきり角兵衛獅子の太鼓の音が大きくなつた。何か藝をしてゐるらしい。人々の笑ひ聲が正月らしく聞えてゐる。鴨介は寢卷の紐も解けかゝつた姿で二階の窓の障子を開けた。

角兵衛獅子は、隣りからミなりへミ舞ひ狂つてゐた。やがて鴨介のゐる家の前まで來るミ、その獅子は途端に舞ひを止めて、大きな獅子の口をポカン

と開けて鴨介の二階を見上げた。二階から見た故か、鴨介にはその獅子が子供の角兵衛獅子とは思へなかつた。

明けて三日は初雪だつた。夕方電気がつくミ街は森閑として、遠く犬の吠える聲が淋しく聞えた。下の子供は晝間の遊び疲れで寝たらしい。甲高い女房の聲で鴨介の來客を告げた。

矢瀬太郎と鴨介は、七年ぶりの邂逅だつた。共に十八の秋に海草の香も高い徳島の漁師村を出奔したのだつた。そして鴨介が太郎から三圓の金を借りたこと、二人の音信は不明になつたのである。

一人の友は失業の困苦、一人の友は角兵衛獅子になつて七年後の春を迎へたのである。互ひにその不遇を嘆き合つたが、まだ二人の胸の底には青春の血が流れ燃えてゐた。太郎は現在の鴨介の不遇を殊更の如く同情した。その結果として失業青年、大和田鴨介は、その明る日から角兵衛獅子になつ

た。そして街から街へミ舞ひ狂つた。

食ふといふことは辛いもの、鴨介が角兵衛獅子になつた三日目に鴨介の氣も知らない角兵衛獅子の親方は、鴨介の住んでゐる露地の中にその太鼓の音も勇ましくはいつて行つた。鴨介の冠つた獅子の大きな口のなから見えるものは、顔みしりの長屋の子供達と金棒引きの女房たちの顔だつた。

しかも何と因果な日であらう、今日に限つて梅干婆さんの娘のハーちゃんまでが家の門に立つてお可笑氣に鴨介の獅子舞を見てゐた。獅子は金齒の口をムズツミ締めて新しい春を祝つてか、大地を踏んで舞ひ廻つた。

(附記——この鴨介が作者のある年の春だと思つたら如何でせう?)



ルービヒザア

通月印名内
社会式株西琴本日大

をがきはらしよれいのおくのて
小笠原流禮忠孝

十五
二幕

中座正月狂言

藩主小笠原豊前守が明神々獄に狩する一匹の孕み狐が飛び出すので、矢先に懸けんぎするのを、家臣小笠原隼人が遮つて助け、下に對する上の慈悲を説くと共に、愛妾お大の方の容色に溺れて藩政を顧みぬのを戒める。併し諫言は耳に逆らひ、隼人は閉門となりお大の方や佞臣犬上兵部は重用される。隼人は小笠原遠江守に訴へ主家の改革を行はんごし、曾て召使であつたお早に密書を託す。これを耳にした兵部はその密書を途中で奪ひ取らうと計り足輕の岡田良助を誘つてその役を引受けさす。良助はお早から密書を取上げようとする企むがお早が容易にその手に乗らぬので、遂に龍ノ口のお壕端で欺し

討ちにし、件の密書を取上げ、兵部はこれを收める。そして後事の世話を約して良助を江戸へ落し、隼人は口實を設けて土牢へ幽閉してしまふ。

其後兵部は決して約を履んで良助一家の面倒をみてゐるわけでもないのので、偶々良助が家に戻つてみるに、丁度掛取りが大勢來てゐて、家族はみじめな暮らしの上にお早の亡靈に悩まされてゐるので、良助も初めて迷ひの夢が醒め、同時に兵部への復讐を思ひ立つ。そこで兵部の屋敷へ忍び入つて一味徒黨の連判狀を盗み出し、折から歸國の途上にある遠江守に直訴せんとする。偶々お早の夫、仲間小平次に出會ひ、女房の仇を斬り懸けられる。双方必死

に渡り合ひ、遂に良助は小平次に斬られるが、末期に臨み改心の次第を打明け、件の連判狀を小平次に託して落入る。小平次はそれを持つて遠江守に直訴せんとするが、恰もその時遠江守の乗物が狙撃される。これは兵部の仕業であつたが、遠江守は家臣が替へ玉になつてゐたので無事であつた。併し兵部はそれを知らなかつた。

前に隼人の爲に救けられた狐は、報恩の爲に隼人を牢から救ひ出し、遠江守の館へ導く。斯くて愈々兵部の悪計は暴露され、お大の方も自刃し、お家安泰に目度度しくなつて了る。

——配役——

小笠原豊前守	吉三郎
犬上兵部	市藏
お大の方	鶴之助
小笠原隼人	魁車
小平次	吉三郎
女房お早	鶴之助
岡田良助	延若
小笠原遠江守	梅玉

大森痴雪作

小さん金五郎

三幕

—中座正月狂言—

しつほり濡れる春雨の夜の戀物語。
これは先代延若の出シ物の中でも評判の高かつたもの、「髮結の手は油だらけ」さいふセリフなご今も芝居好きの人々の記憶に残つてゐる。

—配役—

金屋橋金五郎 延若
額の小三 梅玉

金屋橋の金五郎さいふ髮結は、粹で堅くて氣前よく、色町の女ごもの噂の種なる男。茲にまた島の内に男ぎらひを賣り物にしてゐる額の小三さいふ藝者がある。金五郎と小三はお互に心の中では憎からず思つてゐるものゝ意地を張り合つて色も戀も無い風に見えたのには理由があつた。

船場の富豪千草屋の娘お崎と許嫁の木津屋六三郎が大村屋のお糸さいふ藝者と深くなり、親が家寶の初花の茶入を持ち出して五十兩の質に入れたこゝから勘當の身ごなり、太鼓持六ツ八身を落してもお糸と逢ひ續けてゐる。金五郎はこの千草屋に恩があるのでお

崎の爲に六三郎とのお糸との縁切りを受け、小三は妹藝者の意地として二人の戀を逐ひさせようこ

努力する。

爰にまた

お鶴さいふあわてもの

の髮結がる

て金五郎に

岡惚れして

ゐる滑稽が

数々ある。勝曼坂の春の宵、小三金五郎の争ひもいつか戀の濡れ場に早變り

、お崎六三郎と共に二組の相合傘。

角 若

ナシバ駅前南街映画劇場北東
電話 76 一六六 四

義 茶

木津屋六三郎
大村屋お糸
千草屋娘お崎
女髮結お鶴

長三郎 錦三郎 延三郎 霞三郎 若三郎 梅玉

片岡鐵兵原作

高利貸の女秘書

二幕 六場

角座初春狂言

敷島金融會社事務駒田千作は事業慾と刺腕まで日に日に發展してゐる。未だ獨身なので母や叔父は妻帯をすすめても、彼はそれを一蹴して事業に熱中してゐた。然し女秘書の募集廣告を新聞に出したことは、無意識の中に孤獨がさうさせたのではないか？

千作の同窓、松村宗太郎は理想家肌で事業に失敗し、工場と邸宅を抵當にして巨額の融通を千作に依頼するに至つた。併し親友松村の答は、いづれ調査の上でさういふ冷い言葉に終始した。松村は戀人宮田秀子との婚約に父が不同意であるので、事業の挽回を意圖すると共に、秀子とは三年後を約して一先づ別れることに決した。

秀子は職業婦人として千作の女

秘書募集に應じ、速かにバツスした。彼女の聰明と純潔さは千作に夢からずシヨックを與へた。併し女秘書としての彼女の手始めの仕事、それは松村の資本の現狀調査書であつたことは、何さいふ皮肉か彼女は愕然とし慄然とした。千作は延期無しの條件附で松村が申出の金額を融通した。

戀愛遊戯に巨萬の遺産を浪費した種上から没收した庭の内で、千作は熱情を秀子に打明けた。秀子も好意は持つたが、松村との誓ひを守つてその誘惑と争つた。

千作は病を發して入院したが秀子の献身的な看護の力が、程無く全快するを得た。松村の方は支拂日が迫つてもどうすることも出来なかつた。盡實の行はれるに臨ん

で松村が千作を訪れた時、事務所は、愛する女と、丸裸にされたに働く秀子の姿を見て驚いた。彼は總てを斷念した。これより前、秀子は窮地に在る松村を救はうとして千作に計つたが、それは容れられなかつた。丸裸になつた男の現狀に反つて秀子の熱血は湧いた。彼女と生死を共にする者は松村以外に無かつた。

女の情熱の烈しさに打たれた千作は、愛する女と、丸裸にされた親友との爲に、自分を犠牲にして二人を救ふ覺悟を極めた。彼は松村の債務に關する書類をすべて火に投じた。そして思つた——松村と秀子との間にはもう家柄だの財産だの問題は無くなつたのだ。二人は心から堅く握手することが出来るだらう、新しい生活に入る事が出来るだらう。

繁華街に近く、交通至便

閑雅な和洋室！

◆モダン階上浴室新設◆

南地ホステル

一宿一
一 半
二 圓
三 圓
額半憩

南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

あかつき座を見る

喜光則子

曉座の存在は前からきいてゐたが公演を見るのは始めてである。併しあの人々にあれだけの技量を見た時、實際敬服せざるを得なかつた。あんな小さい所でなく、もつと大きく公演させて大勢の人々に見物させるべきだと思つた。

観客も一部分それもまあ内輪が多いらしく、まるで踊のおさらへの様だ。もつと廣く一般好劇家にあの人々を知らすべきだと思つた

第一の「曾我對面」は右之助の十郎、謹也の五郎、兩方とも柄にはまつてゐた。第二の「同志の人々」出演者皆がよく呼吸がそろつて曉座同志の人々の藝術が發輝された。右之助の左馬之助も謹也の是枝も熱演だつた。扇車の河内介ぎこちなさもなく父らしい勘皇家

らしい落着いた態度が感心させられた。其の他同志のムムバ一魁藏、秀彌、光信、豊太郎等々中にも光敏といふ人のはつきりしてゐるのに感心した。第三「中村仲藏」實際この公演の狂言の撰定が不思議に曉座の人々に何か暗示を與へる様な物ばかりだ。

第二場の仲藏の煩悶、治助の友情、工夫のついた喜び等自然だつた。秀彌の浪人さ仲藏いゝ具合にマツチしてゐた。お近お岸の二女性がいゝ具合に芝居全體に淡い軟かさゝを與へてゐた。

此後もつとくしつかりさ人々の成功される様祈つて止まない。そして出来るだけ研究会や公演の敷を多くして關西歌舞伎の將來に貢献されん事を希望する。

旅行の御相談と

全國遊覧地代表放館の

御案内は！

観劇券と

観劇會の御用は！

大阪道頓堀 角座前

氣分の案内所

増利三

電話南貳六四番

清元 卯 の 花

「賑民壽萬歲」——「卯の花の雪で兎を作るなら」の文句に始まつて、佃や端唄がかりを聴かせ、二上りで隅田川の風物を詠み、鳥追や萬歳の氣分を出して賑やかに、派手で粹な處もある語り物、作曲は二代目延壽の妻磯女だらうこのこと。近來素踊として振附けされたが、干支に因み今年の中座初春狂言として上演するに當り、新に榎茂登陸平氏が振附した。雪の住吉大社を背景として、萬歳才藏が御代を壽く所作なき輕快に舞ひ納める。

(廿一頁より續く)

平右衛門がおかるを手に懸けやうこして斬り掛けるこ、おかるは懷紙をバツミ投げつける、懷紙がバラ／＼と散る、それを抜き身で拂ひつゝ平右衛門が駈け抜ける、あの素ばらしい工夫、それが繪畫的である點に於て二層光彩を放つてゐる。この演出の如きは、古典歌舞伎の名演出中で五指に屈せられるものであると思ふ。

『いろは評林』には、四つ目が由良之助の本意本體であるが、狂言としては七つ目を第一の見所とす云つてある兎に角、此段は由良之助始め、平右衛門おかるの活躍舞臺で、芝居としては、全く「第一の見所」であらう。

シリワクオネルに核結

…科病柳花…

院医原藤

★番 六三六二 戎話電 入西健ノ溝筋橋戎★
六六〇六

シリワクオネルに核結

定 價 一 部 金 貳 拾 錢

(送料 壹 錢)

半 年 六 冊 金 壹 圓 拾 錢

一 年 十 二 冊 金 貳 圓 貳 拾 錢

(送 料 共)

▼振替を御利用の場合に

東京四〇五七七番

▼天野米太郎口座へ御拂込の事

▼廣告取扱

大 阪 電 報 通 信 社

北 區 中 之 島 二 丁 目

▼廣告の御用は「電通」又は當編輯部へ御申込の事

昭和十四年一月八日印刷納本

昭和十四年一月十五日發行

大 阪 市 南 區 久 左 衛 門 町 八 番 地

松 竹 株 式 會 社 大 阪 支 店 内

發 行 兼 編 輯 人 烏 江 鏡 也

京 都 市 中 京 區 御 池 堀 川 東 入

印 刷 所 マ サ ズ ミ 印 刷 所

大 阪 市 南 區 久 左 衛 門 町 八 番 地

松 竹 株 式 會 社 大 阪 支 店 内

發 行 所 道 頓 堀 編 輯 部

大阪新名所としてデビューした

治療・娯楽・芝居・宴会會

每日夜開演 專屬劇團

食堂
撞球場
大劇場

生長溫泉泉

地から湧き出る

市内唯一の天然温泉

實に良く効く温泉治療

—— なくてはならぬ温泉!!

温泉の効能

内用 各種貧血、萎黃病、慢性消化器病、弛緩症、食物停滯、弛緩性便秘、慢性喉頭及氣管支加答兒、新陳代謝病及全身病（糖尿病、脂肝病、痛風腺病）

禁忌

興奮性神經病、胃酸過多症、消化器、癲症、結核腎臟炎

浴用

腎能性神經疾患（ヒステリー）、神經衰弱、殊ニ神經性心臟病、慢性婦人及男子生殖器諸病、（月經異常、慢性子宮筋炎、流産ノ傾向、不妊症、遺精、精液漏、陰萎、慢性接腫腺炎等）慢性病及關節痠麻質斯、輕度ノ春通病、中樞及末梢性痺（經久性半身不隨、小兒麻痺等）諸病快復期腺病質

大阪・生長溫泉 貫四島 番九二三堀佐土電

（入丁半北車下停電 目丁三通大島貫四電市）

東京松竹少女歌劇の大スタア津阪オリエの主演映画

菊水太平記



津阪オリエ(二役)主演

川浪良太郎 共演

坂東好太郎 共演

高田浩吉 特別出演

北見禮子 主演

志賀靖郎
坪井正哲
堀間宗六
風間宗六
天野双一
玉島愛造
富本民平
中村政太郎
梅若禮三郎
石原須磨男
新妻四郎
中村正太郎
井上晴夫
奈良澤一誠
鹿島英二郎
白河富士子
最上米子
柴田篤子
國替美津枝
助演

脚本 藤井滋司
監督 冬島泰三
撮影 森尾鉄郎

定價 金二十銭

昭和十四年一月十五日發行(十五日發行)
昭和十四年一月十五日發行(十五日發行)